

槌田敦の「気象学における業績(文献等)」一覧

(甲1号証)

2009年12月22日

- 槌田(1976) 「核融合の限界と資源物理学」日本物理学会誌 31(1976)pp938-941  
(要旨)大気と水の循環(気象)は熱機関であって、余分のエントロピー(40cal/degcm<sup>2</sup>)を宇宙に捨てることで、地上の資源を作っていることを示した(original)
- 槌田(1978) 「資源物理学の試みⅢ－生存の理論」、科学 48(1978)pp303-310  
(要旨)地球の熱収支から、大気と水の循環が 41cal/degcm<sup>2</sup>の余分のエントロピーを宇宙に捨てて資源を作り、生命の存在を保証していることを示した
- 槌田(1992) 『熱学外論－生命・環境を含む開放系の熱理論』(朝倉書店)pp123-130  
(要旨)熱物理学を、従来の孤立系、閉鎖系から開放系へ展開し、この応用問題のひとつとして「エントロピー論的気象学」を提起し、また「炭酸ガス温暖化論の行き過ぎ」を論じた。
- 槌田(1998) 「地球は興味深い熱学系」日本物理学会誌 53(1998)616-617  
(要旨)気象は回転重力場での気体の熱学であり、その循環運動の重要性を示した
- 槌田(1999) 「CO<sub>2</sub>温暖化脅威説は世紀の暴論」、環境経済・政策学会編『地球温暖化への挑戦』(東洋経済新報社)pp230-244、「松岡コメントに対する回答」同 pp251-255  
(要旨)気温の変化がCO<sub>2</sub>の濃度の変化に先行するなど11の事実を挙げ、気温高がCO<sub>2</sub>増の原因であることを示した。なお、この頃、物理学会と環境経済・政策学会で毎年CO<sub>2</sub>問題を講演した(甲2号証)
- 槌田(2006) 『CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている』(ほたる出版)  
(要旨)地球大気の熱物理学を解説し、気温の上昇によるCO<sub>2</sub>濃度の増加を示した
- 槌田(2007 a) 「CO<sub>2</sub>を削減すれば温暖化は防げるのか」、日本物理学会誌 62(2007)115-117  
(要旨)人為的CO<sub>2</sub>大気中の過去分の蓄積量は6ppm。CO<sub>2</sub>濃度増の大部分は自然増。気温の微分はCO<sub>2</sub>濃度の微分により1年程度先行。気温が原因でCO<sub>2</sub>増は結果
- 槌田(2007 b) 『CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている(増補版)』(ほたる出版 2007年4月)  
(要旨)人為的CO<sub>2</sub>の大気中に蓄積する量は今年分を加えてもわずか 8.5ppmであることを示した(以後「槌田の等比級数論」と呼ぶ)(甲3号証)。残りの大気中CO<sub>2</sub>はすべて自然原因であった。この考察だけで、人為的CO<sub>2</sub>温暖化説は完全に否定される。

槌田(2007c)「CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている」、気象学会大会(2007年10月)講演番号A217  
(要旨)「槌田の等比級数論」を発表した。また近藤の計算を紹介し、気温の微分はCO<sub>2</sub>濃度の微分より1年程度先行するので、気温が原因、CO<sub>2</sub>増は結果と分かる。

槌田(2008a)「温暖化の脅威を語る気象学者のこじつけ論理」季刊 at11号3月号 pp65-82  
(要旨)大気中の人為的CO<sub>2</sub>の量はわずか8.5ppmに過ぎないとする「槌田の等比級数論」を解説。つまり、人為的CO<sub>2</sub>による気温上昇はありえないと発表

槌田(2008b)「反論を受付ない気象学会は学会といえるのか」  
気象学会誌『天気』2008年3月号 p67

(要旨)『天気』に掲載された河宮論文に対する反論を受付なかったことに異議  
近藤、槌田(2008a)「CO<sub>2</sub>濃度の増加は自然現象」、

気象学会誌『天気』に論文を投稿(2008年4月)  
(要旨)気温とCO<sub>2</sub>濃度の測定値を用いて、気温とCO<sub>2</sub>濃度の変化率(年増加率)の位相が一致することを図示。これにより、気温高がCO<sub>2</sub>濃度増の原因であることを示し、近年の平均気温はCO<sub>2</sub>濃度の上昇しない温度よりも0.6°C高いことを示した(以後「近藤・槌田の発見した事実」と呼ぶ)。

槌田(2008d)「CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている(2)」気象学会大会(2008年5月)講演番号A211  
(要旨)「近藤・槌田の発見した事実」を発表し、近年の平均気温はCO<sub>2</sub>濃度の上昇しない温度よりも0.6°C高いことを示した。

槌田(2008e)「原因は気温高、CO<sub>2</sub>濃度増は結果」物理学会誌への投稿論文最終確定版  
(要旨)気象学会誌『天気』に投稿した論文を中心に、「近藤・槌田の発見した事実」を解説し、人為的CO<sub>2</sub>温暖化説は成立しないことを示した(甲6-1号証)

槌田(2008f)「CO<sub>2</sub>濃度増は気温高が原因である」季刊 at13号9月号 pp113-119  
(要旨)「近藤・槌田の発見した事実」を解説し、CO<sub>2</sub>削減策は無意味であると示す

槌田(2008g)「CO<sub>2</sub>温暖化説は間違っている(3)」気象学会大会(2008年11月)講演番号A101  
(要旨)「近藤・槌田の発見した事実」を解説し、気象学者の責任を問う

近藤、槌田(2008b)「大気中のCO<sub>2</sub>濃度増は自然現象であった  
(I).その原因は気温高である」気象学会誌『天気』に論文の再改定稿(2008年11月)  
(要旨)「近藤・槌田の発見した事実」の投稿原稿(4月)を査読者の意見をいれて再改定したもの。しかし、掲載は結局拒否(甲6-2号証)。そこで、東京地裁に提訴(2009.5.27)(甲13号証)

槌田(2009)「事実は人為的CO<sub>2</sub>温暖化説を否定する」、

『地球生態系で暮らそう』(ほたる出版)pp282-283

(要旨) 気象学会に提出した「近藤・槌田の発見した事実」をまとめて示した(甲4号証)

### 【結論】

槌田は1976年から30余年、熱物理学としての気象学も研究し、人為的CO<sub>2</sub>は大気中にわずか8.5ppmしか存在しないことを示した(「槌田の等比級数論」)。

また近藤邦明氏との共同研究により、気温そのものとCO<sub>2</sub>濃度の変化率(年増加量)の位相が一致することにより、①気温がCO<sub>2</sub>濃度増の原因であることと、②現代の気温はCO<sub>2</sub>の増加しない気温に比べて0.6℃高い、というふたつの事実を発見した(「近藤・槌田の発見した事実」)。

しかし、気象学会は、「近藤・槌田の発見した事実」の発表を妨害し、また東京大学は、『地球温暖化懐疑論批判』という書物ではこの「事実」の発表が存在しなかったことにした。このことは、人為的CO<sub>2</sub>温暖化論者にとって、この「事実」が決定的な影響をもたらすと自覚していることを示す。